『この橋で、いつか』

野村由美

◆登場人物

女１（なつ）・少女

女２（よしこ）・老女

＊1　本作品は、ひとり芝居として令和２年度宮崎県高等学校演劇研究大会で上演したものを、二人芝居に書き換えた作品となります。

＊2　セリフに｜｜｜｜傍線が点いてるカ所は、中国の言葉でのセリフの設定ですが、日本語のままでもかまいません。

＊3　一部、｜｜｜｜傍線が点いているヶ所で、ロシア語やモンゴル語でのセリフでもよいセリフがあります。

序章

秋の夕暮れ。
一人の少女が、夕暮れの橋を、自転車を押しながら渡る。
少女、橋の真ん中で立ち止まり、川面を見入る。
沈む入り陽。
少女、川面を暗い暗い瞳でみつめている。
反対側から、老女が手押し車を押しながら橋を渡ってくる。
老女、少女の様子をなんとなしに見ながら、声をかける。

老女　あら、今年はもう渡り鳥が来たっかねぇ。こりゃ早えもんじゃ。ねぇ。

声を急にかけられた少女、身を固くする。

老女　えぇ、あら、そん制服は、高凪高校ん子かね。
少女　・・・あ・・・・・はぁ・・。
老女　懐かしいねぇ。私ん頃と全然変わらん。
少女　・・え・・？
老女　びっくりしたね？（笑）こん婆さんも、昔は、花の女学生やったってすが。（笑）
少女　卒業生・・ですか・・？
老女　旧高女のなぁ。あぁ！包子、あったがなぁ、あぁ、あったあった。これ、食べなさらんね？作りすぎち、配ってまわりよったってすが。
少女　え・・・・・。
老女　ほら、はい。
少女　あ・・はぁ・・。

老女、少女の顔を面と向かって見て、はっとする。
老女の口から、中国語の歌、「何日君再来」のワンフレーズが溢れる。

老女　・・あ・・あぁ、急に、あぁすんませんな。
少女　中国の歌・・ですか・？
老女　あぁ、すんませんな、すんません。お嬢さん・・
少女　え・・。あの・・いや、さっきの歌、何か・・・・。
老女　あ、あぁ、あれは満州で・・満州で生き延びちょる時に、わしに歌ってくれた人が・・おってな。・・・なんでやろな、。今、思い出してしもて。はら、なんでやろな。なんで・・。

秋の空を、渡り鳥が横切って行く。

老女　・・私がお嬢さんぐらいの時は、満州におったってすわ、就職で。
少女　・・満・・州・・？
老女　知りなさらんね。
少女　（うなずく）
老女　わしも・・あんま人にゃ話してこんかったからなぁ。わしも・・。
少女　え・・　。
老女　満州はぁなぁ、中国の北の方にあってなぁ、わたしゃずっと、満州は日本の一部やち思っちょった・・・。まぁ、今、ロシアがいろんな国を自分の国やち言うて滅茶苦茶なことやってるが、そんなもん、やっとったんですわ。今になって考えたら、おかしな話ですけどな。私は、何も考えんじ、花形職業のタイピストとて、満州鉄道に就職してなぁ。遠足みたいな気分やったぁ。李香蘭は街ん中におるしなぁ。こん田舎におったら一生会えんかった。でん、あん日、全て全て・・・全て・・・・

第一場　そして、はじまり

朝の静かな空気。
雀の穏やかなさえずり。
蒸気機関車のスチーム音が聴こえてくる。
舞台の上に、少女２のみ。時間を気にしながら、そわそわしている。

女２　もう～なつ～、まだ～？
女１　おばさん、ちょちょっとまって、あとちょっと。
女２　もう～、なんで同じ歳なのにおばさんっていうのよ～。
女１　だって、おばさんくさいじゃん、よっちゃん。
女２　ひっど～！何それ。
女１　いいじゃん、おじさんっぽくないだけ～。
女２　なつ！
女１　お待たせ～！

息せき切って、女１が走り込んでくる。
旅に出るのか、大きなリュックを背負っている。
二人の少女、部屋のドアを開けて、中に入る。

女２　おはようございます！すみません、今日から私たち、日本に帰ります！連絡が直前になってごめんなさ・・・

女２、はっと動きが止まる。女１、ぺこりと頭を下げたまま。

女２　あ、あの、警備員さん、今日、会社休み・・でしたっけ？

女２、顔が強ばる。

女２　え？満鉄本社の人達はみんな、昨日の最終列車で大連（たいれん）に引き揚げた？

女２、自分の机に走る。
机の上を見ると、そこに見慣れた文字の書き置き。
名前は書いてないけれど、わかる。
よしこが恋しく思っている人の文字。
思わず、手が震える。

女２　富太郎さん・・。

書き置きを見た瞬間。時が凍る。

女１　よっちゃん、どうしたの？？

女２　・・・・「最終列車・・・乗車業務のまま・・大連に留（とど）まります。出勤したら全て捨てて、朝の始発で大連へ来てください。待っています。（以下ロシア語で）私と結婚してくださいませんか？」・・・。

女２、胸が詰まり、手紙を抱きしめる。

女１　え、全て捨ててって・・！わ、それ、富太郎さんからの結婚の申し込み？？

女２　え・・・？あ／

女1　／あ、そう言えば、隣のミツトモ商事の人もね、先週みんな大連に移動したの。それで、ほら、チョコレートたくさんもらっちゃった！

女1　なつ、それいつの話？

女2　え、8月6日・・だったかな？

女2、一瞬で顔が青ざめ、手が震える。

女2　なつ！走って！！ほら、急いで！あの列車に飛び乗るよ。

女1　え・・？次のでいいんじゃん？もう動き出すよ。

女2　いいから、急いで！！！！

二人、車両に走り込む。
汽笛がけたたましくなる。

女1　ねぇ、よっちゃん・・、この列車、いつもこんなに遅かったっけ？

女2　もう、いつもならとっくに大連に着いてる時間なんだけど。

やがて、列車がきしみ止まる音。

女2　え・・？ちょっと、ここは始発の停車駅じゃないでしょ？

女1　おばさん、見て！満州の人が、い～っぱい駅に集まってる・・・・。

女2　え・・・？

女1　？ラジオみんな聞いてるみたい。

女2　ラジオ？

女、客車の窓を開ける。

一気に、蒸気機関車の石炭の匂いが雪崩れ込む。
二人、むせながら、ラジオに耳を傾ける。

音源「玉音放送」

女1　え・・・？これって・・・
女2　日本が、戦争に・・負けた・・？

女二人、顔を見合わせる。
恐怖に身がすくむ。

一斉に沸き起こる群衆の歓喜の声。

列車の車体が、ボコボコに叩かれる音がする。

女1・2　キャー！！

窓からよじ登って車両に入り込もうとする満州人。

女1　え？何？この人、やだ！！
女2　なつ、窓閉めるよ！！！！
女1　いや～！！！！！もう、入ってこないで～！！！

二人、必死に、窓を閉める。
窓が閉まると同時に、列車がゆっくりと動き出す。

女1　はぁ・・・やっと動き出した・・・よっちゃん？

二人、車窓からの風景を見て言葉を失う。

女2　ちょ、ちょっとっと待って！なんでこの列車戻ってるの？？

女1　え？これ大連行きでしょ？？あと一駅で大連だよ！

女2　何してるの！戻して、戻して！！

女1　戻って～！戻ってよ～！！！

叫び続けるその声は、群衆の声にかき消されてゆく。

溶暗。

第二場　1945・8・17

怒号と戦車の音。

女1　来た・・・！

女2　うん。

女1　どうする！

女2　どうするったって、満州には防空壕もないし！

女1　ソ連軍って、死刑囚を前線に送り込んできたんでしょ？

女２　うん。
女１　北の開拓団の男性はみんな殺されて、女性はみんなソ連兵にやられた・・んでしょ？
女２　・・うん。
女１　よっちゃん、死ぬ？
女２　え？？
女１　昨日、寮の女性社員全員に、青酸カリ渡されたじゃん。
女２　うん・・。
女１　飲む？
女２　ば、バカ！！寮長も言ってたでしょ、最悪の時はって。
女１　でもさ、最悪の時はもう、生きるのも死ぬのも選べないんじゃない？
女２　だ・・・だから、最悪ってのは／

／ドアを激しく叩く音。

女２　来た・・！
女１　よっちゃん・・！
女２　ふ、風呂場に隠れよう！！

女１・２、風呂釜の中に飛び込み、蓋を閉めて息を凝らす。
なおも激しくドアが叩かれる。ドアがバンと開く音。
ソ連兵が建物に雪崩れ込んでくる靴音が響く。
なにやらロシア語らしい言葉が聞こえる。
小型機関銃（マンドリン）の射撃音。
モノの割れる音。
叫び声。
不協和音が町を占拠する。

長い沈黙。

やがて、静寂。
そこに、小さくノックの音。
聞き耳を立てる。
聞き知った声。

女２　あ・・寮長・・？！寮長、ご無事でしたか？

女２、恐る恐るドアを開ける。

女２　え？１階の子たち、みんな・・機関銃でやられたんですか・・・？
女１　え・・そしたら、さっちゃんは、さっちゃんは？？？？

女１，寮長からの返事に呆然と立ち尽くす・・・。

女２　・・・わかりました、今から・・ですね。はい、あ、大丈夫・・・です。・・・・・。はい・・。少しでも、きれいに・・・きれいにしてあげて・・送りましょう。
女１　さっちゃんが？え？なんでさっちゃんが？さっちゃん、ずっと、日本に帰りたいって言ってたのに・・、なんで・・なんでさっちゃんが・・・？？
女２　すみません、寮長・・・。なつはさちこさんと仲良しだったから・・・・・・。え？明日、女性職員は全員丸坊主になるんですか？お坊さんみたいに？・・・・男装・・・ですか。北の街で、坊主にした女性は・・・ソ連軍に・・・手を出されなかったんですか・・・・わかりました・・・。

二人、寮長の支持の下・・階下の友人を、荼毘に付し、くたくたになって、寮の中庭に戻ってくる。
身近な人を失い、弔った、二人・・。
気付くと、虫の声。が、聴こえて・・いた。

空には満点の星。

女２　・・・さっちゃん、帰りたかったよね・・・・帰りたかったよね・・日本に・・。
女１　・・・・・・・・。
女２　満州（モンゴル）ではさ、星は、死んだ人の魂なんだって。だからみんな星は見ないんだって。
女１　・・・・・・・・・。
女２　・・・満点の・・・星・・・だね・・・。

女２、さちこへの鎮魂の歌を口ずさむ。
歌「嘉義丸の歌」朝崎辰恕（一番）

女２　お腹・・・空いちゃった・・・。こんな時なのに・・・・・・。

女１、ポケットから、何か取り出す。

女１　あ・・、チョコ。
女２　・・・チョコかぁ・・・・・・・・・。・・・。なんか、別の世界の食べ物になっちゃったね・・。
女１　食べる？
女２　・・そんな気持ちになれないよ・・・・。
女１　・・・さっちゃんの・・お通夜・・だから・・。
女２　！

女1　朝が来るまで・・・起きててあげなきゃ・・。
女2　さっちゃんと・・一緒に・・・ね・・・。
女1　・・・・うん・・・。

二人、チョコを噛みしめる。

血の匂いなのかチョコの匂いなのか

生と死が入り交じる。

第三場　新京・ダイヤモンド街

賑やかな人の雑踏。
鶏のけたたましい鳴き声。
いらっしゃいませと、人々が言うが飛び交う通り。
女1・2が、餅が入ったガラスの蓋がついた木箱を胸の前にして、大きな声をあげている。

女1・女2　お餅はいかがですか？柔らかくて美味しいお餅ですよ～。お餅はいかがですか？ありがとうございます。またお願い致します。
女1　・・・なんか、買う人より、売る人の方が多くない？この通り。
女2　うん・・。餅七〇銭で仕入れたから、1円は売り上げないとね。いらっしゃいませ、お餅はいかがですか～。

二人、餅を売る。

女1　あんこ餅、食べたいな～。
女2　あぁ、あん餅・・か～。
女1　今年の正月に食べたあんこ餅美味しかったなぁ。
女2　そうだね、寮の中庭でみんなで餅ついてね。
女1　うん、さっちゃんと、餅の丸め競争・・して・・・。
女2　・・・・・・・・。
女1　私・・・明日も明後日もここでお餅・・・売れてるのかな・・。
女2　え・・？
女1　・・・・春が来るまで・・、毎日、毎日、たくさん日本人が死んで・・・、もう埋める場所さえなくなって山積みになってるじゃん。そして、その死体を犬が食べてるんだよ？？・・・昨日まで、昨日まで、この通りで生きてた日本人が・・・さ・・。・・・もう・・・明日は自分があそこで死体になってるんじゃないかって思いながら・・思いながらあそこを通るの、もう・・もう耐えられないよ！
女2　・・・・・・・。
女1　そうよ・・、なんであたしがこんな目に遭わないといけないの？？あんこ餅・・食べたいよ、チョコレート食べたいよ、ハンバーグ食べたいよ・・。それに・・、あの人、あの路地のところに立ってる女の人、ここまで生き延びてきたのに、ソ連兵や満州の人に体を売って暮らしてるんだよ、日本人の恥さらし！！あんな人がいるなんて、絶対に許せない！あぁ、もうやだ、あたし、そこまでして生きていたくない！

女1、ポケットから、青酸カリを出そうとする。

女2　なつ！！！！

女2、女1から叩かれると思って、身構える。

よしこ、なつの意に反して、ぐっとなつを抱きしめる。
よしこ、泣いている。

よしこ、涙を抑えて、やっと口を開く。

女２　なつ・・、死んじゃだめだよ、死んじゃだめ。全部、全部その先がなくなっちゃう。みんな、悲しい思いになって、前に進めなくなっちゃう。
女１　でも、あたし、
女２　なつ、あんたが辛いのはよく分かる、分かってるよ、私も。でもね、あんた、今、大事なこと・・、見えなくなってるよ。
女１　え？
女２　今、・・・・私とあなたが、二人無事で生きて・・・生きていられるのは・・・本当にすごいことなんだよ・・・・・・。それに・・、あの体を売って暮らしている方々を悪く言ってはだめ。あの方々がいるから、私やあんたが、こうやって道で商売をしてても、無事でいられの・・・無事で・・・・。だから、あの方々に、感謝しないと・・・・・・・。ね。・・・みんな、必死に生きてるんだから・・・、日本に・・・絶対帰るって・・信じて・・・。
女１　・・・・・・・・・。
女２　さっちゃんの生まれた街に、行こう、一緒に。さっちゃんと。
女１　・・・・・・・・・・。
女２　・・・あ、へへ、こんな顔してたら、お餅売れないわね、さ、笑顔笑顔！頑張ってお餅売ろ！
女１　・・・・・・・・・・。ありがと・・・おばさん。
女２　なんでこんな時におばさんなんていうのよ。
女１　今日は・・おばさんって呼ばせてよ。
女２　何よ、それ。（笑）

二人、元気を振り絞り、再び餅を売る。

女２　お餅はいかがですか～？お餅はいかがですか～？柔らかくて美味しいお餅ですよ～。
女１　ありがとうございます。・・・・、お餅はいかがですか～？あ、ありがとうございます。またお願いします。
女２　ありがとうございます。またお願いします。

二人、一生懸命、道ゆく満州の人々に餅を売る。
冷やかしで見て買ってくれない人もいる。
罵声を浴びせられたり、石を投げつけられたりもする。
日本人を差別的に見下して買う人もいる。
でも、ひたすらに餅を売る。
生きるために。
やがて、夕方。
やっと・・餅が売れる。

女２　は～・・・。やっと１円の売り上げ！なつ、帰ろうか！
女１　は～！つかれた～。
女２　そうだ、今日の夕飯、芹の白和え作ろっか。
女１　やった～！
女２　あそこの小川にたくさん芹が生えてるの、この前見つけたんだよね～♡
女１　さすがオバサン！
女２　ヨッッチャン！
女１　は～い、おばさん（笑）

女二人笑う。二人で、小川沿いの草花や野草を摘みながら歩いて行く。

すると、男性の満州人に声をかけられる。二人、身を固くする。

女１　え？あ、こんにちは。あ、あの私たち、その・・・え・・？この草、何にするのかって？

女２　あ、えっと、これを和えて、食べると美味しい・・んです、それで、

女２、身振り手振りで白和えを説明する。
一人の男、にこやかに、女二人に話しかける。

女２　え？あ、あの、つ、つまり、そこのダイヤモンド街の中華飯店で働かないかって？え？ひと月一人５０円で私たちを雇うって？えっと、今日の売り上げが三十銭だから・・・。！！！

女二人顔を見合わせる。

女２　あ・・・あの・・・、私たち、日本人・・・なんですけど・・・いいんです・・か？

男がうなずく。

女２　あ、ありがとうございます、働きます！働かせてください！

女１　あの、よ、よろしくお願いします。

舞台は、中華飯店へ。中華鍋を振るう音がする。

女２　空いたお皿をお下げしてもよろしいでしょうか。ありがとうございます。またお越しくださいませ～。

女１　（ご来店）ありがとうございました。

女１、女２、にこやかな中にも、どこか緊張した感じで、店に立つ。
女１、机の上の皿を厨房に下げる。

女２　もうお店閉めてもよいですか？
女１　あ、は～い、郭さんが、もう店じまいしていいって。
女２　じゃ、掃除しよっか。
女１　うん。
女２　・・・あんた、郭さんとあんまり親しくなりすぎないようにしなさいね。
女１　・・・え、うん・・分かってるよ。
女２　私たち日本人を、こんなフツウの金額で雇ってくれるなんて、絶対、私たちをどこかに売り飛ばそうとしてるか、お嫁さんにしようと思ってるに違いないから。
女１　そうかなぁ。・・・そんな人じゃないと思うけど。
女２　あんた、そうやってほだされて、満州人と結婚とかなったらどうなるの？日本に帰れなくなるでしょ？
女１　う・・うん、そうだね。
女２　しかもさ、私たちが通ってくる間に、他の満州人に襲われたりしたら大変だからって、このお店で一緒に寝泊まりもしてるでしょ？絶対気を抜いたらだめよ。
女１　う、うん・・・。でもさ、
女２　でも、何？
女１　全然、夜、手を出してこないよね。
女２　・・・！あ、あんた！！！女の子がなんてこと言うの？！
女１　ちょっと最初は嫌だったし、怖かったけど、あの墓地の横を通らずに済むなら、あたし、いいかなって。
女２　なつ！

女1　よっちゃんも、手を出されてないでしょ？
女2　あ、あの、だから、その言い方、やめなさいって！！
女1　は～い、オバサン！
女2　もう、知らない！・・でも、ほんと、仁さんと郭さん、いい人だけど、お嫁さんにとか言われたらすぐ逃げるわよ、わかった？？
女1　う、うん。でもさ、あの満州人の仁（にん）さんと郭（かく）さんみたいに、いい満人の人がいてよかったね。ソ連兵に混ざってて、私たちの荷物を根こそぎ持ち去った満人と同じ満人とはとても思えない（笑）
女2　だからって、その・・・気を許しちゃだめよ！！
女1　は～い。そう言えば、寮に野菜売りに来てた満人のおばちゃん、元気かなぁ。
女2　懐かしいわねぇ（笑）おばちゃん、元気にしてるかなぁ。・・・元気かな、富太郎さんも・・・。
女1　富太郎さんかぁ・・・、富太郎さんは、無事に日本に帰れたのかなぁ。
女2　さぁ・・・どうだろね・・。
女1　そういえば、おばさん、いつの間に富太郎さんと知り合ったの？
女2　え？あぁ、なんかね、タイプライターで打った資料を持って行った時にね、ちょっとメモ帳を忘れたの。そしたら、何も言わずに、こう、メモ用紙くれたの。
女1　で？
女2　え、それから、少しずつ話すようになって。
女1　で、お付き合いするようになったの？
女2　え！？ば、バカ。つ、付き合ってる・・とかじゃ・・なかったけど・・。
女1　でも富太郎さん、毎日オバサンの机にメモ置いてたじゃん。
女2　！あんた、見てたの？？
女1　見てたも何も、目立つじゃん、富太郎さん。
女2　そ、そうかなぁ。
女1　だって、旅客専務だよ～。カッコイイじゃん。
女2　え、ま、うん、かっこいい・・よね。
女1　あたしだったら、さっさと「お付き合いしてください」っていうけどなぁ。
女2　あんただったらね～。

女1　でも、あんだけ毎日メモ置いてたら、フツウ付き合ってるでしょ？
女2　ロシア語とモンゴル語・・、習ってたの。
女1　？ロシア語とモンゴル語？
女2　うん、お客さんには、ソ連人、モンゴル人も乗るでしょ？だから、富太郎さん、いつ行ってもこう、ロシア語での挨拶・・とか、モンゴル語での挨拶とか、辞書自分で作りながらね、会話集とか作ってたりしてね、それを私がタイプライターで打ってあげたり、習ったり、みたいな感じ・・かな。＊3

女1　で？
女2　で・・って何よ。
女1　だから、付き合ってたんでしょ？？
女2　ま、まさか！・・・・ずっと・・好きだったけど・・・。
女1　富太郎さん、何も言ってこなかったの？
女2　（笑）そりゃそうよ、だって・・・・・・。
女1　だって・・・って何よ。
女2　もう、そっとしといてよ、だって・・・一緒にいられるだけで・・いいかなって思って・・。
女1　は～、そんなのんびりしてたなんて。
女2　のんびりって何よ。
女1　あたしだったら、
女2　私は・・いいって・・・思ってたの・・・。まさか、こんな事態になるって思ってなかったから・・。
女1　ちょっと後悔してる？
女2　うん・・・。すごく・・・・。すごくね・・・・。

女2、富太郎の手紙を取り出し、涙ぐむ。

女1　あ、ごめん、ごめんよっちゃん！！
女2　へへ・・いいの・・久しぶりに、富太郎さんに会えたような気がしたから・・。
女1　ごめん・・・。

女２　いいの、ありがとう、なつ。・・・。私、絶対・・絶対帰る・・・日本に。
女１　うん・・・。うん・・私も。
女２　そうよ、二人で帰るのよ。
女１　うん、そして・・・さっちゃんの・・・生まれ故郷に・・行く。
女２　・・・うん・・・。

女二人、うなずく。
二人、気を取り直して、店内を掃除する。

女１、厨房から郭に指示を出される。

女１　は～い、わかりました！ねぇ、よっちゃん、今から郭さんが、水餃子の仕込みを教えてくれるって。あたし郭さんの水餃子大好き～。大好き餃子♪大好き餃子♪
女２　こ、こら、なつ、（さっき慣れ慣れしくしちゃダメって、言ったばっかりでしょ。）
女１　いいじゃん、美味しいものは美味しいもん♡

二人、郭さんから、水餃子の皮の作り方を習う。
作業を習いながら、郭さんに質問をする。

女１　ねぇ郭さん、なんで私たちを雇おうと思ったの？ひょっとして～、そのままお嫁さんにしてしまおうって、いう作戦じゃないよね～？
女２　なつ！
女１　ちゃんと聞いとけば、気にせずにすむじゃん。
女２　でも・・・・・。
女１　ねぇ、郭さん、結婚してますか？
女２　なつ！
女１　ほら、結婚してないって。え？胸が子どもみたいだから、もっと餃子食べろって？？もう～！！

私のことからかってるでしょ??郭〜！（笑）

二人、思い切り笑う。

親しくしてはダメだと思いながらも、訪れる穏やかな時間。

そこに、突然、ソ連兵が入ってくる。

女１　あ、ソ連兵だ・・・。

女２　あ、え、えっと、（ロシア語で）ご、ご注文は・・何ですか？

女１　おばさん、逃げよう。

女２　・・・は?ダワイ・・・!!?女をよこせ・・・！

女１　おばさん、逃げて!!!

女２　え・・仁!!

女１、奥の部屋に走るが、女２足がすくんで動けない。

女１、女２を引っ張る。

仁がさらに女二人を奥の倉庫に突き飛ばしドアを閉める。

そこに小型機関銃（マンドリン）を床に射撃する音。

女１・２　きゃー!!!

奥のビール瓶の山が一気に崩れ、けたたましい音が鳴る。

その音に怯んで、ソ連兵は店を去って行く。

小さなノック音。

女ー・2、震えながら、ドアを開ける。

店の床は、ガラスの破片が散乱している。

女2　仁・・・・？郭・・・・・・？

震えている女2のところに、仁がやってくる。

郭は、店の入り口のところで仁王立ちになっている。

女2　二人とも・・私たちのために死んだらどうするのよ・・・！ 仁・・・・手が・・震えてるじゃない・・・。ごめん・・ごめんね・・・え？日本人の女の子二人、怖かったけど、ちゃんと守っただろう、って・・・・・・、バカ・・バカ・・バカ～！！！！

女2、号泣する。

命がけで自分達を守ってくれた恩人に、

今までずっと疑いの眼差しで見ていた自分に。

第六場　君に捧ぐ、何日君再来

春の嵐で黄砂が街を覆った後、夏が来る。

夏が来る頃、引き揚げ船が、大連からではなく、葫蘆島（ころとう）から出る、という噂が広まってくる。

女２　いらっしゃいませ～。
女１　は～、この時期の黄砂って、ほんとすごいね、拭いても拭いても、机ざらざら。
女２　そうね（笑）日本の黄砂ってこれに比べたらかわいいもんね。
女１　ほんと。もう砂嵐みたい。
女２　あ、はーい。今日の仕事、ここまでいいって。
女１　いつもよりちょっと早いね。
女２　どうしたんだろ？うわっ、びっくりした！あ、仁さん、どうしたの？え？話？私と？
女１　・・・？
女２　そこの公園で・・？・・うん、わかった。なつ、ちょっと行ってくる。
女１　いって・・・らっしゃ～い。キヲツケテ。
女２　（お嫁さんとかそんなんじゃないよ。）

二人近くの公園へ。
公園には、大きな湖。橋が架かっている。

女２　うわ～！！この公園きれい～！一度来てみたかったんだ～！あ、包子！！私これ好き～！！ありがとう（笑）

女２，橋から湖を見ながら、ほかほかの包子をほふほふ食べる。

女２　あぁ、美味しかった～！！！こんな外出、久しぶり。ありがとう、仁さん！あ～、で、仁、話って何？

仁、店を閉める話を切り出す。

女2　え・・・お店今月で閉めるの？え？赤字・・・？あ！！私たち給料のせいじゃないの？？？え・・・日本への引き揚げ船が出る話・・知ってたの・・・・・。ごめんなさい・・言い出せなくて・・・。え？葫芦島ってところから船が出るの？？大連からじゃなくて？？え、やっと日本に帰れるね・って・・仁さん・・・・・・。

女2、喜びと仁の優しさに複雑な思い。

女2　え・・・・・包子の・・・・・作り方・・私に・・・・？

女2、包子の作り方の紙を大事に手に取る。

女2　・・・・・あのね・・・仁さん・・、私ね、ずっと謝りたかったことがあるの。私ね、ずっと、あなた達は、私たちが日本人だから、ってからかって雇ってるんだろうって、ずっと思ってたの。いつも郭さんも仁さんもいい人だったけど、本当は悪いことを考えてるんじゃないかって、ずっと疑ってたの・・あの日まで・・・・。こんなに、こんなに、本当に私たちのことを大切に守ってくださっているのに、なんで、あんな疑いの目で見てたんだろうって、ずっと、ずっと、申し訳なくて・・・申し訳なくて・・・・。自分が恥ずかしくて・・・。・・・・・・え・・・？いつかまた会おうって・・・。うん、絶対、絶対に会いに来る。え・・？歌を教える・・？あ、じゃあ紙に書いてよ。え・・・書けない・・・歌・・なの？なんで？え？書いたら効果がなくなる？？何の効果？？？・・・（笑）わかった、じゃあ、覚える。で、なんていう歌なの？・・「何日君再来」？・・・うん、歌って。・・えっと、ハオはぶうちゃんかい～、もう、発音が悪いとか言わないでよ～ねぇ、どんな意味？自分で調べろって、もう、意地悪～～！（笑）せ～の、で一緒に歌ってくれる？え、だって、自信がないもん。せ～の、

♪何日君再来（中国語）、二人、歌いながら溶暗。

第七場　あの橋で、いつか、君に

夕暮れの橋。
少女が老女の話に、耳を傾けている。

少女　・・・そんな話・・テレビの中だけの話って思ってました・・・・。
老女　みんな、みんな・・・言えんがね・・言えんがね・・・。どんだけ同級生が満州に渡って帰って来れんかったち・・・言えんがね・・・生きて帰って来れんかった子のおばさんたちに、叔父さんたちに、言えんがね・・。言えんとよ・・・・。言えん・・。
少女　・・どうして・・私に・・話してくださったんですか・・・。
老女　・・・なつにな、
少女　え？なつさん？
老女　なつに・・・あんたさん、そっくりじゃって・・目のあたりが・・・
少女　なつさん・・どう・・
老女　帰りの船でな、死んだ。あと2日で日本じゃった。死んで・・死んでしもてな・・あと、あとちょっとやったとになぁ、なつ・・・。海に、水葬。骨もない。なつ・・。
少女　え・・そんな・・・。
老女　さらにな、同じ引き揚げ船に乗ってる日本人に・・財布を盗まれてな・・。なんで・・・？って、な・・。ヒトがヒトでなくなるんよ・・・戦争は。
少女　・・・・・・。
老女　なつを亡くして、どうしようもなくて・・。蒸し風呂のような真っ暗な船内にうずくまっちょった。真っ暗な船内で、膝抱えて、仁とみた、あの日の夕陽をずっとずっとずっと思い出しち

よった・・。自分も死ぬなら、最後まで、きれいな瞬間に包まれていたくてな。

少女　・・・・・。

老女　・・命がけて帰る船の中で、心を支えてくれた歌が、ほれ、あん歌じゃった。・・・お嬢さん、好きな歌・・・あんなさるな・・・？

少女　（うなずく。）

老女　歌は大事じゃって。どんなに辛いときも、歌が、寄り添ってくれる。どんな暗闇でも・・な。

少女　・・・・・・・。

老女　あなたも、あんたさんらしく、生きなさないな。

少女　あ、あの。と・・富太郎さん・・・っは、ご無事だったんですか・・？

老女　富太郎さんは・・・日本に無事に帰ってきてました。

老女　あ、よ、よかった・・・・あ、あの・・・ご結婚・・・出来たんです・・か？

少女　・・・・やっと会えたのが、１０年前でしてなぁ・・・

老女　・・え。

少女　富太郎さんが亡くなる直前に、やっと・・・所在がわかってですなぁ。

老女　え・・・・・・・・・。

少女　・・・戦争・・・じゃったから・・・。でも・・・でも・・いいんです。無事で、無事で生きていてくれたから、それで・・・。最期に、会えたから・・・会えたから・・・・。何も言わんでも、お互い・・気持ちは一緒だったって分かったから・・それでいいんじゃ・・・。

老女　そんな・・／

少女　／生きてさえ、生きてさえいてくれれば、いい。それで・・。

老女　でも・・・・。

少女　・・仁さんに教えてもらった包子、冷めても美味しいのよ、家に帰ってお食べ。ほら、暗くなる前に、お帰り。おうちの方、まだ帰らんかぁって、待っちょりゃるが、きっと。／

老女　／あ・・・あの！あ・・あの・・・・また・・お会い・・できませんか・・？よしこ・・さん。

少女　あ・・あぁ・・・あぁ・・・あら、嬉しいことを・・・あら・・あら・・。あぁ、じゃあ、また

老女　この橋で、会いましょうか。この時間に。

少女　・・・はい・・・！

少女、ぺこりと頭を下げて、自転車を押して去って行く。
ぺこりと下げた様子は、昔のなつによく似ていた。

少女がいなくなった橋。
老女、夕景を見つめる。
夕景に、遥か彼方の彼の人に
彼岸に旅立った彼の人に
大切な歌を、風にのせて歌う。

老女♪「何日君再来」を歌う。
中国語の歌は、途中で日本語に変わっていく。

風はうたを乗せて彼方へと走り去る。
メロディは、国を超える。
歌は、時を越える。
相手を大切に思う歌に
国境はない。
温かい、人のぬくもりに
国境など、ない。
いまも、これからも、ずっと。

幕

〈参考資料〉

①「１９２０～１９４０年代の満洲におけるロシア人と日本人の「満洲経験」に関する思い出
１９２０～１９４０年代の満洲において居住したロシア人と日本人の回想記の比較 研究」、大阪大学大学院言語文化研究科 言語文化専攻 ヤキメンコ レギーナ
https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/67062/29318_Dissertation.pdf

②「戦争体験談 vol.7 旧満州からの引き揚げ～命がけで家族を守って～」、人生ものがたりてのんweb media
https://tenon.site/2018/07/09/おかしあった戦争のおはなし-旧満州からの引き揚/

③今にして思うこと」 小森百合子さん ソ連兵侵入 床下で恐怖の時間、毎日新聞
https://mainichi.jp/articles/20200108/ddl/k40/070/351000c

④「綾瀬はるか『戦争』を聞く」で明かされた、満州からの引き揚げ女性に強制された性接待、WEZZY
https://wezz-y.com/archives/57557/2

⑤NHK 戦争証言アーカイブズ 証言記録 市民たちの戦争「”引き揚げ“の嵐の中で ～京城帝国大学 医学生の戦争～」
https://www2.nhk.or.jp/archives/shogenarchives/shogen/movie.cgi?das_id=D0001110454_00000

⑥旧満州の思い出（5）満州脱出、ぶんやさんちの記録
https://blog.goo.ne.jp/jybunya/e/eb381bc62e65095bef7fa438a81fe372

⑦NHK 戦争証言アーカイブズ 昭和天皇、終戦の玉音放送
https://www2.nhk.or.jp/archives/shogenarchives/sp/movie.cgi?das_id=D0001410387_00000

⑧NHK 戦争証言アーカイブズ 「終戦直前に渡った満州で」 岡村道夫さん
https://www2.nhk.or.jp/archives/shogenarchives/kioku/detail.cgi?das_id=D0001800112_00000#page2

⑨NHK 戦争証言アーカイブズ「満州で憲兵、戦後は大工」黒澤孝治郎さん
https://www2.nhk.or.jp/archives/shogenarchives/kioku/detail.cgi?das_id=D0001800113_00000

⑩宮崎県公式チャンネル 宮崎の戦争記録継承